

神亀二年乙丑の夏五月、吉野の離宮に幸す時
に、笠朝臣金村の作る歌一首 并せて短歌

九二〇番

あしひきの み山もさやに 落ち激つ 吉野の川
の 川の瀬の 清きを見れば 上辺には 千鳥し
ば鳴く 下辺には かはづつま呼ぶ ももしきの
大宮人も をちこちに しじにしあれば 見るご
とに あやにともしみ 玉かづら 絶ゆることな
く 万代に かくしもがもと 天地の 神をそ祈
る 恐くあれども

反歌二首

九二一番

万代に 見とも飽かめや み吉野の 激つ河内の
大宮所

九二二番

皆人の 命も我も み吉野の 滝の常磐の 常
ならぬかも